

セイセキ ZINE とは？

セイセキ ZINE (セイセキジン) は毎月1つのテーマを決め、聖蹟桜ヶ丘エリアと所縁のある「人の想い」にフィーチャーする、市民参加型ローカルマガジンです。多摩市在住の有志の市民クリエイターを募り、セイセキ愛に満ちた誌面づくりをしています。

#7

セイセキ ZINE

聖蹟人

聖蹟桜ヶ丘“People”ガイド

theme
描く人

好きをもっと好きになろう。

聖蹟桜ヶ丘には

描き、表現したくなる夏がある。

Take
Free



SEISEKI
PEOPLE

1

季節の移り変わりを表現し、風流を描きたい

出合いを大切にする「みんなの和菓子店」

聖蹟桜ヶ丘の和菓子店として親しまれている「和菓子処 花鳥風月」。今年でオープン7年目。
着実にファンを増やし続けてきた同店の篠田ご夫婦に聞く、和菓子づくりに込めた想いとは？

Interview : Nobuko Matsutake

届けたい想いは 和菓子って美味しい！

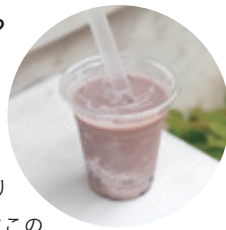
聖蹟桜ヶ丘駅前交差点をいろは坂方向に歩き、最初の信号を右折して約200メートル。「暑かったですよね。ご苦労さまです」

と、笑顔で出迎えてくれたのは「和菓子処 花鳥風月」の篠田ご夫婦。

2人はともに和菓子職人。豆大福の老舗「和菓子 岡埜栄泉」（東京・小石川）の修業時代に出会った。「最中で9年、大福で7年。『億万両本舗和作』（神奈川・横浜）

と『岡埜栄泉』で和菓子の基礎をみっちり学び、2019年7月にこの地に店を構えました。聖蹟桜ヶ丘にした訳は3つ。1つは20歳まで永山で暮らしていたので聖蹟桜ヶ丘に愛着があったこと、

暑い季節限定の「あん latte フラッペ」
(Mサイズ550円、Sサイズ460円)



人気メニューは、餡子にこだわった猫の形をした最中「もにゃか」と「豆大福」。ショーケースには季節の創作和菓子ははじめ、生姜のしぼり汁を入れて爽やかな風味に仕上げた「若貼」、蜂蜜をたっぷり使った皮に自家製小倉餡を詰めた「どら焼」、水羊羹や葛アイスなどが並ぶ。

2つ目は和菓子店が少ない多摩市内にあって地域に根づいたお店になりたかったこと、3つ目は近くに住む甘いものが好きな両親にいつでも和菓子を食べてもらいたかったのだ。甘いものが好きなのはDNAですね（笑）」（桂太さん）

インタビュー中は、終始和やかな雰囲気。奥様の光保さんからこんな話が続く。「私の出身は長野県伊那市です。実家が和菓子店を営んでいたので小さい頃から和菓子が身近な存在でした。創作する一品を通し、季節の移り変わりを表現できるところが和菓子づくりの楽しさですね」
だから店名は「花鳥風月」。美しい自然の風景や風流な趣を楽しむ“心のあり様”を描きたいという、2人の想いを込めた。日本の風土や文化を感じさせる“和菓子の世界”はどこまでも深いのだなあ、となるほど納得。

「今日、妻が作っているごま練切り製こしあんの『アジサイ』（表紙の写真）は、家族で北鎌倉にある“あじさい寺”明月院に行ったとき、美しかった“明月院ブルー”を表現しているんですよ」（桂太さん）
「商品のベースになる餡子づくりは夫の

担当です。餡子は北海道十勝産の小豆、砂糖は雑味のないスッキリした甘さの鬼ザラ糖を使い、一から炊き上げています」（光保さん）

餡子づくりをはじめ、店に並ぶ商品はすべて手作業。聞けば週に数度、朝4時頃に店に出向き、作業をしているとのこと。年末年始をはじめ、繁忙期に入ると餡子づくりの時間は前倒しになっていく。自宅から店までは自転車で10分ほどの距離、奥様とお子さん2人が寝ている時間から、桂太さんの一日はスタートする。そう、篠田ご夫婦は6歳と3歳の子育て奮闘中のパパ・ママでもある。

出合いを大切にする、みんなの和菓子店。小誌が同店をこんな風に称したいのは、ご夫妻のまちとの関わり方、そのしなやかな想いにもある。

聖蹟桜ヶ丘のキッズイベント「KAOFES」をはじめ、京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンター「せいせき たのしいおやつフェス」への出店など、地域のイベントにも積極的に参加している。「聖蹟桜ヶ丘に暮らす人たちとの出合いを大切にしたいんです」（桂太さん）という想いが示すように、まち

とのつながりを大切にするのが「和菓子処 花鳥風月」流だ。

「これからの夢ですか？ ムズかしいなあ。初心を忘れることなく、まちの皆さんに愛される和菓子店であり続けることができれば嬉しいです。多くの人に和菓子の美味しさを届けたいので、多摩市内でもう1店舗。この夢は声を小さく（笑）」（桂太さん）

篠田桂太さん、光保さん

和菓子の名店で修行を積み、2019年7月「和菓子処 花鳥風月」を開業。ご夫婦ともに和菓子職人。現在、6歳と3歳の子育て奮闘中。保育園が休みの日にはお子さんが店にいることも。



和菓子処 花鳥風月

● 多摩市東寺方1-8-14
☎ 10:00～17:00 第2・4月、木曜休
📍 wagashidokorokachofugetsu

世界に1つだけの造形芸術品を描きたい

「模型製作工房 聖蹟」が 聖蹟桜ヶ丘を愛するわけ

大栗川や多摩丘陵などの自然があり、小野神社や縄文遺跡などの史跡も
点在。「聖蹟」の名を冠した模型製作工房の店主が目指すものとは？

Interview、Text：Satomi Yoshioka



作家の個性は自分だけのオリジナルを作り込めるか

資料と複数の工具に囲まれた作業机に向かい、模型作家の垂水政憲さんは、1/700 スケールの微細なパーツを慎重に組み上げていく。製作するのは、軍事的な任務を遂行するために設計・建造された船舶「艦艇」で、戦艦「大和」をはじめ、数多くの作品を創り上げてきた。「お客様からは、『〇年仕様の〇〇を作って欲しい』など、具体的な依頼が多いですね。本や雑誌、ネットを見て、世界観を膨らましなが作業を進めていきます」

オーダーを忠実に再現し、自分のアイデアやエッセンスをさりげなくプラス。精巧さと迫力を兼ね備えた造形で、高い評価を得ている垂水さんだが、決してここまで順風満帆だったわけではない。「小学校低学年の頃、近所のお兄さんからプラモデルを教わったのが模型を作る

きっかけです。その後は音楽の道を志しましたが手応えを感じることができず、会社員として働きはじめました」

家づくりに興味があり、住宅設備会社に就職。「職人さんと仕事をし、道具の使い方や塗装技術を見ているうちに、模型と同じだなと思うようになり、模型づくりを再開しました」と垂水さん。

転職が訪れたのは 30 代半ば。細部にまでこだわった作品が評判を呼び、やがて注文が舞い込むようになる。「人と同じことをせず、どこよりも丁寧に、迫力ある作品にしようと製作しているうちに個別に注文が入るようになりました」

現在、多くの注文を抱える作家として活躍する垂水さん。「艦船模型は、単なる模型ではありません。かつて実在した船や戦争の歴史、乗

SEISEKI
PEOPLE

2

垂水政憲さん

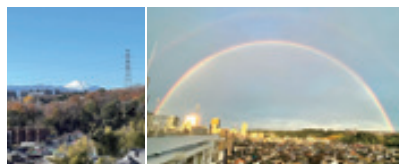
1979年生まれ、東京都出身。「模型製作工房 聖蹟」代表。艦船を専門とする数少ない模型作家。製作した作品は 100 隻以上。緻密な造形と考証が、高く評価されている。



【写真上】多摩川に因む名を持つ、大日本帝国海軍の軽巡洋艦「多摩」。

【中】ミリ単位の部品を作り込み、リアルな世界を生みだす。

【左】「多摩」が氷の海に佇む勇姿を 1/700 スケールで再現したジオラマ



工房のベランダからは、四季折々の多摩丘陵や家並みが一望でき、晴れた日には富士山も見える

組員たちの想いが宿っているんです。こうした作品を通して、平和を考えるきっかけになったら嬉しいです」

聖蹟の住民となり、工房から見える風景を模型のジオラマ制作やイメージづくりにも取り入れている。艦船や乗組員の歴史と記憶、垂水さんの技術と創造力が融合することで、唯一無二、世界に1つだけの艦船が現代に蘇る。

模型製作工房 聖蹟

HPアドレス <https://www.seisekimokei.com>

ブログアドレス <http://seisekimokei.jp>

SNS(X アカウント) @seisekimokei

「依頼製作ご予約受付中」取材時点で約1年待ちになっていますが、ご興味のある方は、HPのメールフォームよりお問い合わせください。

詳細はこちら▶



あれ気になる??
歩いて見つけた

Interview：Sayaka Higa/ Photo：Yufumi Omori

セイセキの 珍光景



村上さん(写真左端)いわく、仲間がいるからより楽しさが増すとのこと。習い事ほど真面目すぎず、ゆるやかにつながることの気持ちよさ。「聖蹟桜ヶ丘の地域性なのかもしれませんが、みんな穏やかで優しいんですね。そういった方たちと、多摩川の風景や文化と一緒に作っているようで、充実しています」

※水辺特有の危険が伴うので、SUPを行う際は専門のレッスンなどで技能を習得し、安全に楽しみましょう。



多摩川の“SUP 通学”の真相調査！

多摩川の水上に見える人影。あれは一体?? 目を凝らしてみると「RIVER PARK 聖蹟桜ヶ丘」の SUP 仲間に合流しようとしている、村上成さん(会社員)の姿でした。村上さんは多摩エリアに住み始めて 20 年。聞けば、マイボードを購入して SUP を満喫中。週末には中河原方面にある自宅から RIVER PARK の SUP クラスに参加するため“SUP 通学”をしているとのこと。「電車を使うと遠回りになるので、多摩川を SUP で渡るほうが時短になるんです。昔は、ここに川の渡しがあったという話も聞いたことがあるので、思いを馳せながら渡っています(笑)」。SUP と出会い、川沿いに住んでよかったなあとしみじみ感じているそう。今まで日常に溶け込んでいた自然の美しさも改めて体感。「水の音や鳥の声ってとても心地いい。忙しい人ほど SUP をやってほしいです」

Q

関戸橋・府中四谷橋がなかった時代、
どうやって多摩川を渡っていたの？

▶

A

渡し舟

昭和 12 年(1937)に関戸橋(旧橋)が架かるまで、舟による「渡し」を利用して人・荷車・馬などが川を行き来していた。

聖蹟の住民となり、工房から見える風景を模型のジオラマ制作やイメージづくりにも取り入れている。艦船や乗組員の歴史と記憶、垂水さんの技術と創造力が融合することで、唯一無二、世界に1つだけの艦船が現代に蘇る。

「関戸の渡し」は関戸と中河原を結ぶ鎌倉街道の渡し場で、中河原村の経営するものを「中河原の渡し」、関戸村の経営するものを「関戸の渡し」と呼んでいた。春から秋の出水期には渡し舟で、川の水量が減る 11 月～4 月までの

間は「冬土橋」という渡舟の代わりに架ける簡易な橋を設けて多摩川を渡っていた。『多摩市史』通史編によれば、渡し舟の製造・修復経費や冬土橋架橋経費などは「加組」と呼ばれる渡船場組合により負担され、渡船場を維持していた。

現在でも関戸橋北詰の近くには「中河原渡し碑」が設置され、右の写真のように、聖蹟桜ヶ丘駅から 5 分ほど歩くと多摩市側に立つ標柱(一ノ宮渡しの跡碑)がある。



資料：多摩市史 通史編 2『関戸渡船場』
© 多摩市デジタルアーカイブ



一ノ宮渡しの跡碑

舞台は多摩市、映画『たぬきがいた』の監督に聞く

多摩地域の描き方、夏の過ごし方

映画を通して地域とつながる映画監督の榊 祐人さん。店主をつとめる「焼き鳥 たぬき」で話を伺うと、ここでも物語が動き出すことに。さて？

Interview、Text、Photo：Tamaki Onda

自らの原風景を描く

多摩市で育った榊さん。子どもの頃の夏の思い出を聞くと「1日中自転車で外を駆け巡っていましたね」。多摩市に引っ越してきた少年のひと夏の思い出を描いた映画『たぬきがいた』の構想のきっかけは、Facebookに投稿された1枚のたぬきの写真。“ニュータウンに現れたたぬき”の姿に、新しいものと古いものが共存する面白さを感じたとのこと。20代の半ば、アルバイト先で出会った“地域の名物おばちゃん”が多摩地域で環境や平和に関する上映イベントに参加していて、映画が好きな榊さんはボランティアスタッフとして声をかけてもらう。映像作品を通して多摩エリアの人たちと交流したことで、スムーズに映画制作の話が進んだ。地元の小学校や団地の住民の協力で、2014年に第1作『たぬきがいた』が完成。

「多摩のまちには人が減ったところもあるけれど、まちを愛する人たちは（良くも悪くも）変わらない（自分も含めて）。制作を支えてくれた方々とは今でもゆるやかにつながっています」

同じく多摩地域で撮影し、市制50周年記念事業として取り上げられた2作目『10年後の君へ』は、映画監督として大きな一歩となった。「どうしても作りたいという気持ちでした。この作品のおかげで、3本目、4本目につながったと思います」

現在は乞田で「焼き鳥 たぬき」を営む榊さん。“たぬき”つながりで映画『たぬきがいた』のチラシを置かせてもらいたいと訪ね、常連客に。先代のマスターが亡くなった際に、榊さんはお店を継ぐことを決めた。実は、この出来事は次回作の構想につながる。「このお店で映画を撮りたい。榊祐人役の榊祐人も登場して…」。この場所で、一人の人生が「映画」になる様子を目撃できるかもしれない。



映画『たぬきがいた』

2014年公開の榊祐人監督の第1作。子どもたちの自然体の演技も話題に。作中に出てくる団地がいいタイミングで借りられたり、「ラッキーが続いた」と話す榊さん。地域住民の方にサポートしてもらう際に気をつけているのは、1度会ったら顔を忘れないこと。無理なく関わってもらうことで、長く関係を築けるのだそう。



たぬきモチーフのグッズが所狭しと並ぶ店内では、常連客の談笑の音が絶えない。「焼き鳥 たぬき」の名物は、炭火焼きの焼き鳥。榊さんは焼き方から学んだそう。日本酒の豊富なラインナップと、お手頃な価格もうれしい。

SEISEKI PEOPLE 3

榊 祐人さん

多摩市育ちの映画監督。「焼き鳥 たぬき」の店主。人や地域のつながりを美しい映像で描く名手。

椅子を持って外に出れば、そこは“憩いの場”

この夏は、チェアリングでひと息ついちゃう？

編集者の大久保潤さんは、折りたたみチェアを背負って散歩に出る“チェアリスト”。「椅子を持つとまちは“座れるライン”で見えてくる」と語る大久保さんに、聖蹟桜ヶ丘をまったく新しい景色へ変えるコツを聞いてみた。

Interview、Text：Akira Andoh/ Photo：Yufumi Omori



※川に入る際は、安全に注意して行なってください。

「吞める景色」を探し求めてまちを歩く

「ここ、座れそうだな。そんな目でまちを見ると、景色が急に立体になるんです」

こう話すのは、編集者の大久保潤さん。チェアリングは、スケートボーダーがなんの変哲もないまちを刺激的な遊び場に変える様子に似ているとのこと。さて？

チェアリングとは、キャンプ用折りたたみ椅子などを持ちだし、好きな場所に腰を下ろしてお酒や景色を楽しむ行為。大久保さんは、「酒の穴」という酒呑みユニットが提唱するこの“新しいものの見方”を書籍にまとめた編集者だ。

滞在は大体一時間ほど。「居酒屋に入るほどでもないスキマ時間に、見過ごしが

ちな景色を発見できるのがチェアリングの魅力です」と大久保さん。本格的なアウトドアではないことが大切で「日常の延長線にあるんです」と言う。飲みものやつまみはコンビニで調達し、ごみはきちんと持ち帰る。「お酒を呑むのって、ただでさえ眉をひそめられる行為。“歩行者の邪魔にならない”迷惑にならずに呑む”がチェアリストの倫理ですね」

チェアリングの一番のつまみは“眺め”。川のせせらぎや雲の流れ、まちの喧騒、四季のうつろいを感じながら缶ビールを開ければ、そこはたちまち“良い酒場”になる。寒い季節は水筒にお湯を入れて

4

大久保 潤さん

東京都生まれ。書籍編集者。パリッ
コ・スズキナオ『椅子さえあれば
どこでも酒場 チェアリング入門』
などを制作。個人出版レーベル
「語ぶるい舎」を設立。



これが
チェアリング
スタイル！

本を読んだり、景色を眺めたり、流れる時間そのものを楽しむ。大久保さんいわく、「ドリンクホルダーがあると便利。ゴミ袋をかけておくのにも、ちょうどいいです」。さらに保冷カップホルダーがあると、どこでも冷えたビールを楽しめる。

チェアリングスポット 3選

- **大栗川**
親水地として整備されていて、川沿いの景色を楽しむやすいのいいですね。川の近くは涼しくて、夏にぴったり。
- **桜ヶ丘公園**
森林浴やバードウォッチングなど、緑豊かな公園はチェアリングに最適。歩行者の邪魔にならないエリアを選んで。
- **桜ヶ丘一丁目緑地**
聖蹟桜ヶ丘を一望できる斜面の緑地。時間帯の変化を楽しむことができる、おすすめの場所。

お湯割りで雪見酒。初夏は双眼鏡を忍ばせ、桜ヶ丘公園のこずえでさえずる野鳥を眺める。「実は自宅のベランダが究極の穴場なんです」とも。家事の合間に椅子を開き、月見酒でひと息。日々の暮らしをゆるくできちゃうのがチェアリングの魅力なのだ。最後に、ビギナーへのアドバイスを尋ねてみた。「椅子を持って聖蹟桜ヶ丘を歩いてみてください。『ここでお酒やコーヒーでも呑みたいな』と思ったら、そこがあなたのチェアリングスポット。この景色で呑めるかどうかを軸にすると、聖蹟桜ヶ丘の豊かな自然を再発見できるんじゃないでしょうか」

みんなのワクワクやドキドキをカタチに♪ 「コネルテ」が思い描く “子どもたちの未来”

多摩地域を拠点にしながら活動する、アートワークショップユニット「コネルテ」の上原恭子さん(写真左)と鈴木ケイナさん(同・中)、保坂万理子さん(同・右)。コネルテが思い描く子どもの未来とは？

Interview、Text：Ayumi Murayama

5
SEISEKI
PEOPLE



アートに正解なんてない 楽しんじゃうのが大正解！

舞台は多摩地域、子ども向けのアートワークショップを中心に活動する「コネルテ」は、知る人ぞ知る5人組のアートワークショップユニットだ。結成は2016年、これまで述べ100回以上のイベントを開催してきた。
——はじめにメンバー5人(取材時は田中令さん、吉原佳世さんは欠席)の関係を教えてください。

上原「アーティストや美術教育家、美術職人など、私たちはアートに関わるメンバーで構成しています。主には仕事のつながり。メンバーには造形や塗装の仕事をしている人が多いんですよ」
——「コネルテ」結成のきっかけは？

鈴木「子どもたち向けにワークショップユニットを作ろうというのが始まりでした」
上原「(本日欠席の)美術教育家の田中がみんなに声を掛けてくれて、それぞれ共感してやってみようとなったんです」

保坂「一人じゃできないことがしたいという思いもありましたね」
鈴木「5人ともライフスタイルや年齢もバラバラで“アート系”という大きな括りでつながっていて。それがちょうどいいバランスだったんですよね」
——どうして子ども向けにワークショップをしようと思ったのですか？

鈴木「実際は子どもだけではなく、年齢や性別も障がいの有無も関係なくみんなにやってほしいというのがテーマです」
保坂「美術に興味はあるけど、どんな風に始めればいいのか分からない人に『思っているより難しくない!』と、私たちのワークショップに参加することで感じてもらえたら嬉しいです」
鈴木「実はそれもあって多摩なんです。都心は情報があふれているので、そこに私たちがあえて行かなくてもいいかなっ

て。美術が好きなお子さんや、それをどう伸ばしてあげればいいか分からない親御さんにこそ、届けたいんです」
上原「『上手に描きましょう』ではないところの追求というか。アートは楽しむものだと思ってもらいたいです」
——「えのぐであそぼう!」など絵の具を使ったプログラムを多く開催していますが、ワークショップで皆さんが大切にしていることは？

上原「親御さんには、なるべく口を出さないと見守ってくださいと伝えています」
保坂「お子さんにはやりたくなかったら無理にやらなくていいよと伝えます」
鈴木「自主性というか本人たちの気づきを大事にしたいんです。迷っている時間も本人の自由。私たちのワークショップには基本、『こうしなければいけない』がないんです。やりたいことが思いつけば、すぐにやってもらっていいし、様子を見たいタイプの人には観察からで大丈夫です」
——ワークショップの前後で、お子さんの取り組み方に変化は見られますか？
保坂「最初は絵の具に触りたくないという子もいます。徐々に触れるようになる子もいれば、最後まで触らない子もいます。多様な関わりこそ、大切にしたい」
鈴木「そういう子も筆を変えたらできる

ようになる場合もあるんですよ。本人なりのこだわりを探りながらやっています」
——ワークショップに参加するお子さんにどんな姿を思い描いていますか？
上原「アートは特別なものではないので、気負わずに楽しんでもらいたいですね」
保坂「私たちのワークショップを通して、アートを知らない人がスッと入れるきっかけになったら面白いと思います。テーマはどこまでも自由、気軽に参加してもらえたら嬉しいです」
上原「アートに上手も下手もなし。ワークショップを通じ、子どもも大人の皆さんも下手だからできないという概念をなくしてもらえたら、嬉しいなあ」
鈴木「アートは特別なことじゃない。楽しんでやったら、それが全部正解なんです。皆さん、どこかで会いましょう」



絵を描くもよし、塗るもよし、全身で絵の具の感触を楽しむのもよし。ココロやカラダを解放した子どもたちが主体的に楽しむ活動と、「みんな違う」をアートを通じて体験するワークショップを企画。



【写真左から…】

上原恭子さん

武蔵野美術短期大学美術科卒。2000年より店舗内装やテーマパーク、美術セットの特殊塗装、壁画製作などの仕事をし、今は画廊勤務もしている。

鈴木ケイナさん

東京都出身。ドイツ・ベルリンにて現代美術を学ぶ。帰国後、作家活動とともにアート講師に従事。2020年より美術教室を開業。

保坂万理子さん

武蔵野美術大学彫刻学科卒。2005年頃より、店舗内装やテーマパーク、美術セットの特殊塗装、ディスプレイ用品等を制作中。

コネルテ

2016年の結成後、主に多摩地域を舞台に、子ども向けのアートワークショップを開催する女性5人組アートワークユニット。多摩市では「ランタンフェスティバル」(JSmile 多摩八角堂)、「せいせきくらがおかメリーゴーランド」、「けえどの会所」でのイベント、「永山団地名店街100m」のワークショップ、「タマタマフェスティバル」ほか、さまざまに多世代をつなぐワークショップを開催。

詳細は
こちら





【写真上】今の時期は、ベアフットサンダルが人気。【下】STRIDE LAB多摩店が毎週土曜朝7時から開催している、WALK&RUN。せいせきカワマチに集合し、まずは多摩川近辺のゴミ拾い。事前予約は不要で、“走ること”の敷居を下げたイベントなので、気軽に参加しやすい。

多摩川の新しい楽しみ方を描く

ランニング専門ショップが提案するWALK & RUNのススメ

シューズ選びや足の健康までサポートしてくれるSTRIDE LAB。

多摩地域で走る習慣を根づかせたいと話す、オーナーたちの想いは？

Interview : Sayaka Higa / Photo : Yufumi Omori

歩くこと、走ることで、まちのみんなの健康を守りたい

—お2人から見て、聖蹟桜ヶ丘はランニングに適していると思われませんか？

齋藤「ロケーションは最高ですね。

せいせきカワマチもできて、河川敷が整備されて走りやすくなりましたよね」

佐藤「少し歩くと、小山田緑地もあるし、川だけではなくて山もあるのが魅力です。

聖蹟桜ヶ丘でランニング専門店のやるからにはランニングやウォーキングを通して、健康なまちを目指したいです」

齋藤「うちの店では『アルトラ』というブランドのシューズをメインで扱っています。裸足感覚で履ける靴、ベアフットシューズとも言われていて、履き続ける

ことで足のアーチを正しい形に補正し、健康的な足に導いてくれる。使い続けると姿勢も正しくなり、体全体の健康にもつながっていくんです」

—現在は、週1回ウォーキングとランニングのイベントを行っていますね。

齋藤「オーナーになった際、為さんから『多摩エリアをランニングの聖地にしたい！』っていう壮大な話をされて。その第一歩のイベントです」

佐藤「走れなくてもOK。歩きから挑戦してほしいので、イベントの名前はWALK & RUN。走っている途中でキツくなったら、『ウォーキングでいいじゃん』っていう」

齋藤「ランニングは橋を渡りながら多摩川をぐるっと回るコース。ウォーキングはそのコースを逆回りするので、途中

【写真左から…】

齋藤 潤さん

ランニング歴が長く、豊富な知識で接客を行う。前職の経験から、店舗イベントでは運営管理などを担当。

佐藤 為さん

自転車店も経営。ランニングを含め、スポーツ全般に詳しい。ランをからめたイベントを数多く計画。

で参加者たちがすれ違うときがきます。そこでハイタッチして励まし合えるので、初心者でも完走しやすいと思います」

—今後予定されていることは？

佐藤「秋にはせいせきカワマチでランニングにまつわるフェスを開催予定。体力差や経験差があっても、同じフィールドで楽しんでもらいたいので、アイデアを模索中です」



STRIDE LAB 多摩店

📍 多摩市一ノ宮 2-19-1 カリアンドラ II
🕒 12:00～19:00、土日祝 11:00～18:00
定休日：月・火（祝祭日の場合は翌平日）
☎ 042-400-5595
https://stridelab.jp/tama/

京王聖蹟桜ヶ丘
SC 便り

多摩市の野菜 de ごちそう祭 開催中！



今回紹介するのは…
京王聖蹟桜ヶ丘 SC
山本航平

せいせき

京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンター

このイベントは多摩市産の旬で採れたての野菜のおいしさを、食体験を通じてお客様に楽しんでいただくことを目的としています。第3回目となる今年は、7月3日～8月31日まで、京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンターで開催中です。多摩市内の農家さんが自主運営し、多摩市産の野菜の直売所である「いきいき市」のご協力のもと、新鮮な野菜を使用したオリジナル限定メニューを、レストランとカフェの11店舗で提供しています。鎌倉時代から農業を営む藤井ファームほか、多摩市の農家さんが心を込めて育てた有機野菜を気軽に味わうことができ、どれも絶品。キャンペーン中には、野菜の日(8/31)にちなんで、京王線沿線の企業であるキュービーとコラボをし、推しの「まぜマヨ」を見つけるイベントを実施する予定です。多摩野菜の魅力を伝えながら、これからも地元とのつながりの拠点となるよう活動していきたいですね。



【写真上】椿屋カフェ（B館4F）の「多摩市産オクラと九州みつせ鶏と香味野菜の紀州梅仕立て」は山本さんもおすすめ。【中】昨年のワークショップの様子。【下】今年のイベントの詳細は公式HPにてチェック！



セイセキ歴史 Walk

#6

Text :
Satomi Yoshioka

多摩村の製氷業

“タマゴーリ(多摩氷)”の名称で親しまれた天然氷

エアコンや冷蔵庫のない時代、涼をとったり、ものを冷やしたりするには、「天然氷」が使われていました。これは冬の間、湖や池の水が自然に凍ってできた氷のこと。切り出して「氷室」と呼ばれる蔵に運び、大量の藁やおが屑に包み、夏まで保存したのです。

そんな天然氷が、連光寺地区で生産されていたのをご存知ですか？ 明治4年(1871)頃から「多摩氷商会」という氷業者が、「桜ヶ丘保養院(現在の桜ヶ丘記念病院)」のあたりで天然氷を作っていました。広さ5間×10間(約166㎡)、深さが3尺(約90cm)ほどの池を3つ作り、水を入れて製氷。寒い時期には一晩で10cmもの厚さになったそう。商会の氷は、府中の料理屋などに出荷され、「タマゴーリ」の名

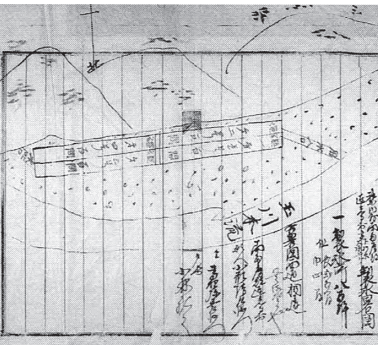
称で親しまれました。

明治19年(1886)頃には、多摩村の凍氷採集業者が同盟し、「玉川氷商会(玉氷社とも)」を立ち上げます。当時の記録によると氷池は337坪(約1114㎡、500坪(1652㎡)という記録も)。製氷規模は30万斤(180t)あり、神奈川第一位(当時の多摩村は神奈川県の)品質を誇っていたそう。玉川氷商会の氷は、個人、商人に関係なく販売され、八王子の西洋料理店などにも売られ、需要は高かったとい

います。多摩村の特産でもあった天然氷作りですが、関東大震災による被害や機械製氷の普及により廃れていきます。連光寺の施設も再建されることはなく、多摩氷は時代の流れに溶けてしまいました。

資料：多摩市史
民俗編
『多摩氷商会半纏(前)』、
『多摩氷商会半纏(後)』

【写真上・中】氷職人が纏った半纏。【下】製氷場が、多摩川本流沿いにあったことを示す営業地域略図。神奈川の氷が採れたという。



資料：多摩市史 通史編2『製氷営業地域略図』
© 多摩市デジタルアーカイブ

舞台は多摩市北部にある里山

「多摩東寺方緑地保全地域」が紡ぐ、未来への眼差し

多摩丘陵の緑の一部をなす良好な樹林地で年間を通して自然の保全保護に尽力する高玉力雄さんに聞く、緑地活動の魅力とは？

Interview、Text：Hisaco Sato



取材当日、「多摩東寺方緑地保全地域」で緑地活動に参加した皆さん。この日、各自のイベントのため、参加者は5名だったが、全員集まると15名超に。写真右から2人目が高玉力雄さん。

東寺方緑地の四季の移り変わりを、緑地活動をとおして味わう

聖蹟桜ヶ丘駅よりバスと徒歩で約15分、小高い里山に足を踏み入れると、耳に入る木々のざわめき、鳥のさえずり。訪れたのは「多摩東寺方緑地保全地域」。市街地に残されている貴重な自然が認められ、東京都により「保全地域」に指定された場所だ。多摩丘陵の緑の一部をなす樹林地で、クヌギなどの雑木林、屋敷林としてシラカシ・ケヤキ林や孟宗竹林が広がっている。

年間を通してこの保全地域で活動しているのは、緑地ボランティア団体「つばみグループ」。東京都緑のボランティア指導員育成講座の卒業生や多摩市が行うボランティア講座の卒業生などで構成され、今年で結成17年目。高玉力雄さんは2期生として「多摩東寺方緑地保全

地域」で活動を続ける、現リーダー（統括）だ。「昔はここから富士山が見えたんですよ。時を経ながら森全体が大きくなって今は見えなけれど。森が成長した証だと感じています。保全地域なので「持ち込まない・持ち出さない」が原則です。春夏秋冬を通して定期的に訪れ、有志の仲間たちと雑木林・孟宗竹伐採や間伐、整備を中心に作業を進めています」

聞けば、過去には近隣にある地域の大学と連携し、次世代を担う学生の緑の保全に対する関心を高めることを目的とし、「東京グリーンキャンパス・プログラム」を10年以上にわたって実施。現在は東京都と教育プログラムを企画中で、小中高生を対象としたプログラムを実施予定だ。「里山の魅力を感じてもらうため、地域の



高玉力雄さん

定年退職前にKOA 森林塾、緑のボランティア指導者育成講座修了。2011年より、現職。樹木・環境ネットワーク協会 里山林塾の講師ほか。



桜ヶ丘団地と東寺方市街地の間にある「多摩東寺方緑地保全地域」には貴重な緑が残っている。この日の緑地活動は、孟宗竹伐採と間伐、雑木整備。

児童館や小学校の子どもたちと竹林体験などを通した“緑の学び”も、これまで実施してきたんですよ」

高玉さんは現在、72歳。「ここは、最初に巡り会った原点の地。元気なうちは活動を続け、次世代にバトンタッチすることができたらと思っています」

今秋には竹刈り体験と竹細工のクラブ体験を実施予定。参加希望の方は東京都観光局の「里山へGO！」をチェック。

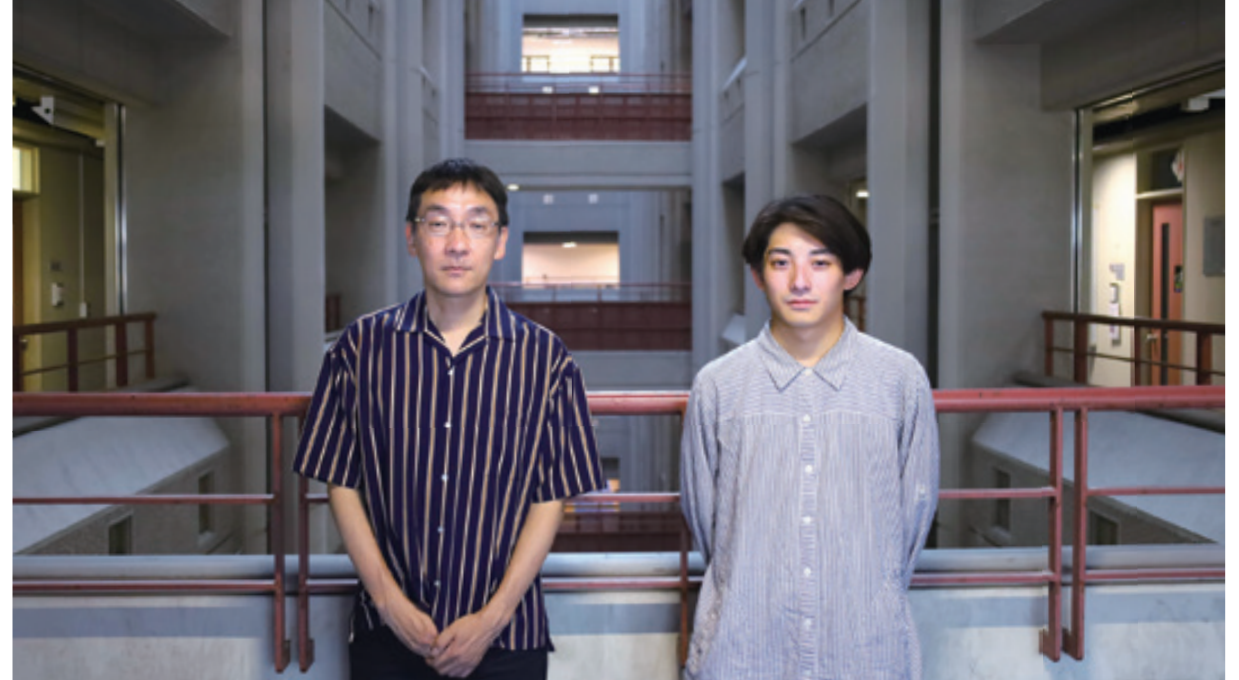
つばみグループ

竹林の管理、樹木の伐採、緑地の下草刈りなど、緑地活動を通し、多摩の豊かな自然の保全保護に尽力する緑地ボランティア団体。

団体紹介はこちらにアクセス！▶



SEISEKI PEOPLE 7



都市の計画とデザイン、そのための市民参加手法、市民自治の制度、NPO等について研究を行う、東京都立大学の饗庭伸教授（写真左）。国内各地の現場において、実際のまちづくりに専門家として関わり、それに必要なまちづくりの技術開発にも尽力中。京王電鉄の山崎は大学院生時代、饗庭教授の研究室で学んだ。



国内各地の現場にて
都市計画のデザインや
まちづくりの技術開発など、
さまざまな領域で活動する
東京都立大学の饗庭教授。
対談のテーマは
これからの郊外まちづくり。
多様な人たちが暮らすほど
まちはおもしろくなる？
専門家の視点でみる、
聖蹟桜ヶ丘の魅力をもつてみた。

東京都立大学
都市環境学部 都市政策科学科 教授
あいば 饗庭 伸
×
京王電鉄
聖蹟桜ヶ丘プロジェクトチーム
山崎 瞭佑

山崎——饗庭教授の専門・研究分野は都市計画やまちづくり、建築です。実際のまちづくりに専門家として関わり、それに必要なまちづくりの技術開発もこれまで多く行ってきた実績があります。「これからの郊外まちづくり」をテーマに、聖蹟桜ヶ丘に考えを巡らせると、このエリアの魅力はどんなところにあると思いますか？

饗庭——聖蹟桜ヶ丘は何度も歩いたことのあるまちです。歩きながら土地のかたち、建物のかたち、人の流れを読み、まちでの暮らし方について想像を巡らせてみると、聖蹟桜ヶ丘はいろいろな視点で話すことができるまちだと思います。暮らしのそばに川があるまち、地域イベントが季節ごとにきちんとあるまち、ランナーに愛される坂のまち、聖地巡礼を楽しめるまち……人によって語られ方が違うまちには、暮らしを楽しむためのヒントが多くあるものです。

山崎——一般社団法人聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメントの一員として「せいせきカワマチ（多摩川河川敷広場）」の運営に携っていると、地域のプレイヤーの方々と多く出会います。これまでの活動を通して感じているのは、聖蹟桜ヶ丘には魅力的な人が多くいらっしゃる。まちは人がつくり、育てていくものなので、多様

な人たちが暮らす聖蹟桜ヶ丘にはさまざまな可能性があると思っています。

饗庭——地域住民の声を聞き、さまざまな想いを拾いあげられる場が醸成されていくと、まちに対する解像度が上がり、眼差しも深まっていくものです。その取り組みの一つとして「せいせきカワマチ」を“パブリックな器”とし、今後どう活用していくのか、楽しみにしています。

“場づくり”という視点でみると、暮らしの場に交流拠点が点在しているまちは、人と人、想いと想いがつながることで交流や活動が活発になりやすいと思っています。今日話を聞いていると、聖蹟桜ヶ丘には暮らしそのものを楽しみたい人が潜在的に多いと感じたので、新しいまちのストーリーができる予感がしました。

山崎——「せいせきカワマチ」（2023年10月に誕生）のプロジェクトはまだ始まったばかりですが、聖蹟桜ヶ丘のまちなかに交流拠点を増やしていくという考え方もとても学びになりました。地域の内外に對して話せる“まちのストーリー”を1つでも増やすことができたらと想像を巡らせてみると、ワクワクしてきます。

饗庭——まちの主人公は地域住民の皆さんです。たくさん対話してみてください。山崎さんは饗庭研究室の卒業生。いつでも相談に乗りましょう。

イベント・出店をしてみたい方必見!

「せいせきカワマチ」活用のABC



“地域で育む、かわまちづくり”をテーマに、一般社団法人聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメントが運営管理している多摩川河川敷芝生広場「せいせきカワマチ」(2023年10月～)。

今回は「せいせきカワマチ」活用のABCと題し、活用にあたっての悩みごとにお応えします!

What's せいせきカワマチ?

「川のある豊かな日常」を感じてもらいながら、エリア全体の賑わいをつくるため、地域に関わる方々が主体となって活用できる場として 2023 年 10 月に誕生した「せいせきカワマチ」。利用可能エリアは芝生広場とキッチンカースペース。詳細については聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメントの利用ガイドラインにてご確認ください。 [詳細はコチラ▶](#)



サポートできること -A-

充実したレンタル備品

お悩み 「イベント・出店に必要な備品を揃えるのは大変…」

ご提案 テントセットや長テーブル、タイニースタンド、蓄電池、テーブルチェアセット、移動式遊具などイベント・出店をするうえで必要な備品類のレンタルを有償で行っています。
※備品は数に限りあり



サポートできること -B-

新たな賑わい創出を目指したイベントの支援

お悩み 「せいせきカワマチでこのまちにない新しい取り組みをやってみたいけど不安…」

ご提案 聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメントでは、活用の相談窓口をRIVER PARK 聖蹟桜ヶ丘にて開設しています。お気軽にお尋ねください。「せいせきカワマチの活用の幅を広げるイベント」や「聖蹟桜ヶ丘駅エリアを含めた地域の回遊性向上を意図するイベントや企画」の実験的取り組みには、補助を行います。そのほか、安全にイベントを実施するための歩行者誘導や夜間照明に関する補助もあります。 ※予算に限りあり

【相談窓口開設時間】
●毎週火曜 9時～12時
●毎週木曜 14時～17時
●毎週土曜 9時～12時(土曜のみ完全予約制)

サポートできること -C-

せいせきカワマチオープンデイ他、実践の場づくり

お悩み 「ひとりでイベント・出店するのは不安…」

ご提案 公募出店型マルシェ「せいせきカワマチオープンデイ」への出店を通じて、初めての方もそうでない方も一緒にイベントづくりに参加することができます。イベントの前後には、準備会や振り返り会などの企画を通じて、次に活かせる学びを得たり、オンライン出店者コミュニティ「せいせきカワマチクラブ」に参加して横のつながりつくることもできます。
※詳しくは『セイセキZINE』#5 (P.14) をチェック



問い合わせ先

せいせきカワマチを使って、何かをやってみたい方をお待ちしております。
本ページに関するお問い合わせは、聖蹟桜ヶ丘エリアマネジメントまで。



seiseki@keio.co.jp

「第4回 学生による多摩エリアのまちづくりに 関するアイデアピッチ」開催

テーマは、「行きたくなる・人が集まるまち」アイデア募集中!

「学生による多摩地域のまちづくりに関するアイデアピッチ」を開催中との情報をキャッチ。京王沿線に在住・在学している高校生と大学生を対象に、沿線エリアに関心・愛着を持ち続けてもらうことを目的とし、テーマに沿った提案を募る企画で今年で第4回。本企画事務局の京王電鉄・兵賀さんに話を聞くことができた。「弊社とUR都市機構さんと共同で開催している企画です。今回のテーマは、『行きたくなる・人が集まるまち』。訪れたくなるようなまちを目指す、アイデアを募ります。エントリーシートを提出後、書類選考を通過した方は京王聖蹟桜ヶ丘 SC アウラホールで開催するピッチイベントでプレゼンテーション。有用なアイデアは具現化を検討します。ワクワク度、創造性、有効性、調査、分析、わかりやすさの6つの審査ポイントがあり、今年は特に“調査”を重視。足を運ぶことで見てくるものも多い

ので、実際にまちを訪れて魅力を感じて欲しいです」

審査は、東京都立大学名誉教授や自治体などが担当。「参加者にはいい経験になるはず」と、兵賀さん。「昨年の優秀賞は、人通りが少なくなる多摩市の夜間帯の遊歩道にボタニカルライトを設置しようという提案でした。具現化できるかとらわれず、学生らしいユニークなアイデアをお待ちしています」

今回紹介するのは…

京王電鉄株式会社
開発事業本部
沿線価値創造部
エリアマネジメント担当
課長補佐
兵賀弘平



【写真上】ピッチイベントの様子。プレゼンや資料作成などの面でも成長できるはず。[下] 昨年の最優秀賞は、多摩市在住の高校生が受賞。熱心に現地に通って仕上げたピッチが高い評価を得ました。



▲詳細はこちら!

募集期間: 2025年6月6日(金)～9月15日(月/祝)

応募資格: 京王沿線に在住・在学の高校生、大学生

選考方法: 【第1次審査】エントリーシート(書類審査) 【第2次審査】ピッチイベント(最終審査)
ピッチイベント: 2025年11月8日(土) アウラホール(京王聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンター A館6階)

市民クリエイター募集中!

京王電鉄と情報誌『BALL. (ボール)』を発刊するけやき出版は共同で、聖蹟桜ヶ丘のまちの魅力を取材・発信し、地域の価値創造を目指す取り組みの1つとして、市民参加型ローカルマガジンの発行を行っています。本誌は、聖蹟桜ヶ丘“People”ガイドをテーマに、毎月1つのテーマを決め、聖蹟桜ヶ丘エリアと所縁のある「人の想い」にフィーチャー。本誌では、有志の市民クリエイターとして聖蹟桜ヶ丘の“まちの魅力”を深掘りする方々を広く募集しています。

【問い合わせ先】

けやき出版
TEL: 042-525-9909 (平日 9時～18時)
MAIL: e-info@keyaki-s.co.jp

まちの掲示板

地域で音楽活動をする演奏家に“演奏の場”を提供し、良質な音楽を多くの方々に届ける「ヴィータ・コンサート」を開催。ぜひお越しください。
日時: 8月22日(金) 14時～16時
場所: 関戸公民館 ヴィータホール
内容: ヴァイオリン名曲コンサート～気軽に楽しめるクラシック～
詳細は「たま広報」(8月5日号)をご覧ください。

編集後記

今回も多くの市民の方々にご協力いただき、『セイセキZINE #7』が完成しました。#7のテーマは、「描く人」。モノを作る人、子どもたちが自由に夢を描けるようにサポートする人。さまざまな描き方を取り上げています。誌面を通して、まちの魅力を知るきっかけになればうれしいです。



過去号をすべてアーカイブしたWEB版もぜひ!!

市民クリエイター

安藤 賛さん、大森悠史さん、恩田環さん、佐藤寿子さん、新留沙織さん、比嘉さやかさん、松竹暢子さん、村山亜由美さん、月削桃代さん、吉岡さとみさん